

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:96-100.

転倒転落におけるリスクマネジメント

小山内 美智子

転倒転落におけるリスクマネジメント

国立大学法人旭川医科大学病院 医療安全管理部 副部長 / 看護師長

○小山内美智子

転倒転落予防策は、患者の尊厳と安全確保において倫理的ジレンマを感じる場面も少なくなく、患者状態をアセスメントする力がジレンマを解決していくと考える。その為転倒転落予防は高度な安全技術であると感じている。

当院においても、急性期の患者や高齢者が多く、ベッド周囲をとりまく環境は、転倒転落予防物品が活用され対応している。センサー類などの物品を患者状態に応じて、活用するべくフローチャートや手順もあるが、現実では変化する患者状態に応じる事ができず転倒転落の発生に至っている。

そこで、転倒転落事例より、防止できたと思われる事例に着目し対応をしていく事を推進した。

1. アセスメントスコアの低い予防策不要の患者に対して

1) 入院当日の転倒転落に着目；要因は環境の変化や翌日手術等により入眠できず体位変換を繰り返す事などから、ベッド柵の2点を標準化して設置する事とした。その後事例の発生は激減した。

2) 患者参加型として「転倒転落予防DVD」の視聴を強化し患者サイドTVに視聴可能できるアクセスを改善し、視聴の状況をラウンドで確認・強化した。ベッド上での不安全行動による事例が減少傾向となった。

改善できる事例に対策を強化し、全体の転倒転落事例の発生率の低下に反映した。

2. 患者特性に対して対応策の推進

1) 身体面（筋骨格系の障害）の障害を特性とする患者には、今までの対策を強化する事、高次機能障害（記憶・注意・遂行機能・社会的行動などの認知障害）の特性のある患者へは、ベッド周囲での転倒転落予防に対して、環境整備・履物・トイレアセスメントなど、患者がとりそうな不安全行動への先取り介入の推進をした。

3. 動機づけと継続の重要性

1) あらゆる場での周知；さまざまな安全の研修やポスター、多くの職員が参加する「安全への取り組み」報告会において職員にデータを示し伝えていった。

2) 対策実施状況の確認と部署との連携；対策を提示した際には、その後部署ラウンドを実施し状況を確認、実施できていない部署にはできない理由とできる為にどうするかを部署RMと話し合い、出来ている部署にもねぎらいと課題について、ラウンドに細やかに部署RMと連携する事が効果的であったと感じている。

これらの取り組みにより、転倒転落発生率（対述入院患者）平成26年度では1.26%まで低下し、介入の成果が見られた。そして現在、「トイレに関わる転倒」予防に取り組んでいる。



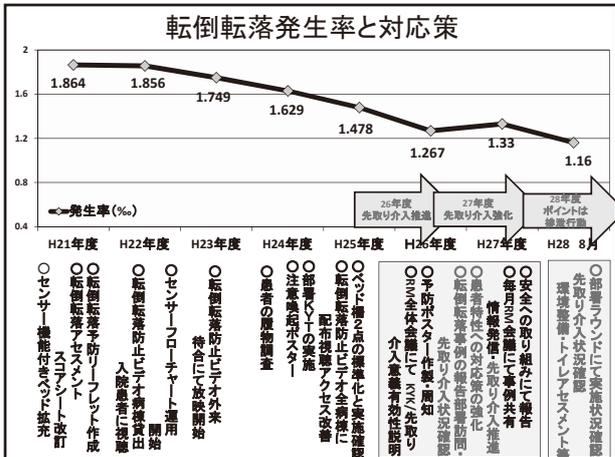
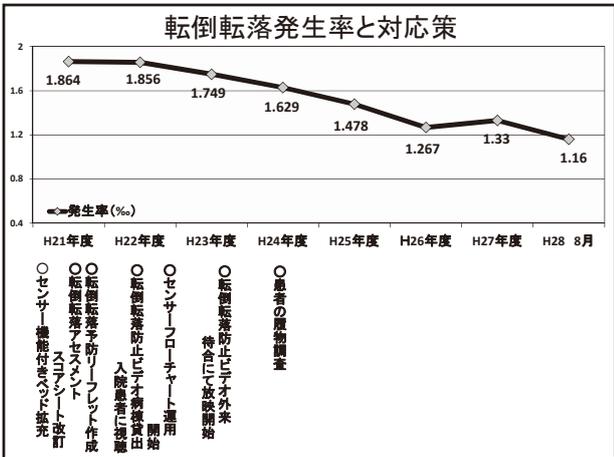
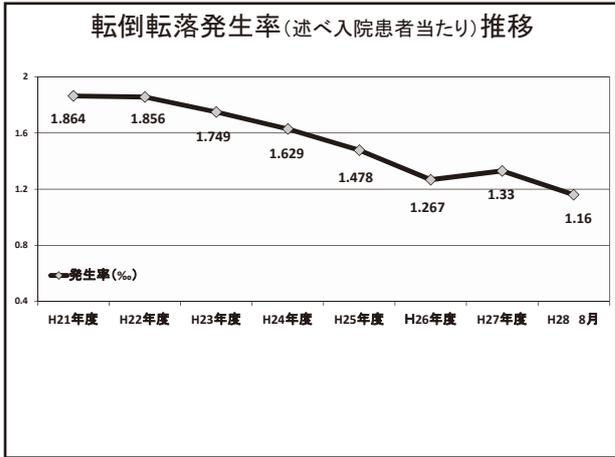
<旭川医科大学病院概要 2016年7月現在>
病床数602床 37診療科 特定機能病院
平在院日数一般:12.5日 平均稼働率一般:94%
看護配置:7:1入院基本料

医療安全管理部
部長(医師)1名
専任リスクマネージャー3名(医師1名は専任、看護師2名は専従、)
専任委員:医師4名、看護部副部長1名、薬剤部副部長1名、
医療支援課課長1名、係長1名

はじめに

現状
患者状況;転倒転落リスクが高い患者:急性期・高齢者等
予防策;センサーや予防物品、ナースコール連動の
ベッドの導入など2000年頃から急速に実施
⇒一定の効果は見られる。が、発生もある。

そこで、事例分析から
防止できたと思われる事例、もったいない事例、
に着目して対応していったことから始まった



ラウンド結果

目的	転倒転落予防におけるKYT						誤認防止
ラウンド項目	（定期・臨時転倒） DVD視聴の手順	トイレでの転倒予防 の未然防止方法	ポスターの活用	DVD / 臨時	先取り介入プラン	厚物マニキュア時 患者反応	与薬時（ベッドサイド） での誤認防止方法
評価方法	手順の確認	リーダーにインタビュー	場所確認	記録の確認			リーダーへ
○階西	入院時：クレーンにより実施；その後反応確認。その他：入院時より記載し後日実施	リスク有；付添中まで	NS内	○/○	○	○	フルネーム確認後薬手帳の氏名と照合
○階東	入院時：担当者実施。その他：表にしていない	リスク有；付添中まで	NS内	○/×	×	×	フルネーム確認後薬袋の氏名と照合
○階西	入院時：クレーンにより実施；その後反応確認。その他：表にしており未実施がわかるので次に実施	きまりはなく、トイレ前で待機	NS内	○/○	○	○	フルネーム確認後薬のシートの氏名と照合

まとめ

1. 実施可能・実施評価が可能な対応策から始める成果が見えることを実感することが、継続への動機づけになる。
2. 一つ一つ提案していくこと。目標を明確にする。フォーカスをあてる。
3. 部署との連携・RMと細やかに連携する事が、実践継続へ効果的。
4. 実施状況を確認すること。部署ラウンド。

